



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	白石詞研究 : 清代から民国期にかけての詞論を中心として
Author(s)	張, 江林
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16666号
Issue Date	2025-09-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16666
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98276
Type	doctoral thesis
File Information	Jianglin_Zhang_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 張 江 林

主査 教授 田 村 容 子
審査委員 副査 講師 熊 征
副査 教授 応 雄

学位論文題名

白石詞研究

—清代から民国期にかけての詞論を中心として—

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、南宋の詞人姜夔（字は堯章、号は白石道人）の詞作品、いわゆる「白石詞」を対象とし、その美学的特質と、宋代から清代・中華民国期に至るまでの受容と評価の変遷を体系的に明らかにした研究である。従来、姜夔の詞風については「清空」「騷雅」といった表現により特徴づける通説的評価が主流であったが、そうした総括的言説の背後にある具体的なテキスト分析や、後代の詞学理論・詞派的評価の変容過程を詳細に検討した研究は少なかった。本論文はその空白を埋めるものであり、詞学史における姜夔の位置づけを多面的かつ動態的に捉え直した点に学術的独創性が認められる。

本論は、まず第一章、第二章において、白石詞に見られる美学が清代の浙西詞派や常州詞派といった詞派ごとにどのように評価され、また晩清から民国期において新たな文学思潮の中でいかに再解釈されたかを丹念に追跡した。これにより、白石詞が一時代的な作品にとどまらず、詞学史全体において「清雅」観の典範として継承されてきた事実を実証的に示した点は、従来の研究を前進させる成果である。

また第三章から第五章にかけては、白石詞における「コロオギ」や「冷」、「梅花」といった象徴的イメージに注目し、それらが詞人の孤高の精神や漂泊の境涯と結びつくことで、独自の美学が形成されたことを提示する。さらに、作品内部の修辞的特質やイメージ操作の精緻な分析を行いながら、同時に詞話・詞選・評論といった二次的資料群を包括的に検討し、テキストと受容史との接合を実現している点も、本論文の顕著な貢献である。姜夔の詞を一個人の作品として扱うのみならず、後代における思想的背景や詞学理論の変遷と相互照応させた点に、本研究の新規性が認められる。

・学位授与に関する委員会の所見

本論は、光緒十九年（1893）刊の楡園叢刻本『白石道人歌曲』を底本とし、現代の詞学者夏承燾・陳書良らの校勘本や注釈を参照して、白石詞の本文を確定した上で日本語訳注を付し、精密なテキスト分析を行っている。この基礎作業の堅実さにより、後続の議論に確実な基盤を与えている点は高く評価できる。

研究の観点としては、大きく二つの焦点がある。第一に、作品そのものの修辞・表現分析であり、とくに自然景物を媒介とした情感表現、象徴的イメージの反復と変奏、音律の細密な操作といった特徴を具体的作品に即して明らかにした。例えば第三章の「齊天樂 蟋蟀」の分析においては、単なる詠物を超え、対象を間接的に描写する中に情感を凝縮する方法が示された。さらに第四章における「冷」の表現や第五章における「梅花」のモチーフに関する考察では、それらが単なる修辞的装飾ではなく、詞人の文学的理想を体現する媒体であることを解明し、白石詞の美学的核心を把握することに成功している。

第二に、受容史的分析である。清代においては、浙西詞派が白石詞を規範的に称揚する一方、

常州詞派は形式偏重を批判するなど、評価が多様に展開した。この評価の差異を、地域的文人サークルの思想背景や詞学理論の発展段階と関連づけて考察した点は、詞学史の内的論理を読み解くものとなっている。さらに、晩清から民国期にかけての再評価や、詞学研究としての深化過程も跡づけ、近代文学研究史における白石詞の位置づけを提示した。

このように本論は、テキスト分析と受容史研究を両輪とし、文学作品の内的特質と外的評価の歴史的展開を結合するという方法的特徴を有している。これは従来の姜夔研究や詞学史研究に不足していた視点を補うものであり、学術的方法論としても以下のような意義が認められる。

第一に、白石詞の象徴的イメージと修辭的特質に対する丁寧な読解を通じて、従来抽象的に語られてきた評価の実質的内涵を明らかにした点。第二に、清代から民国期に至る受容の多様性を体系的に整理し、文学作品が時代ごとに新たな意味を付与される動態的プロセスを提示した点。第三に、テキスト分析と受容史研究を往還させる方法論的試みを通じて、詞学研究における新しい視角を提供した点である。

本論文は書き下ろしの序論と結論を除き、全五章で構成される。うち四章は学術誌上で公刊済みであり、未公刊の一章も現在学術誌に投稿中である。審査の席上では、その学問的水準の高さは客観的に保証されているといえるが、今後は書籍としての刊行を目指すなど、さらに広範な検証を受ける必要がある点が指摘された。また、姜夔の詞が前代から継承している部分と彼の独自性が明確に分けて述べられていない点、受容史の整理と表現の分析との関係が論旨の上で明瞭に結びつけられていない点、姜夔を詞学史に位置づける上で先人の主観的な批評を踏襲しているところが見られる点に改善の余地のあることが審査の席上で指摘されたが、いずれも本論文の成果を大きく損なうものではない。

以上の点から、本論文は中国詞学研究に新たな知見を加えるものであり、学位論文として十分に価値を有するものと認められる。よって、本審査委員会では、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。